

交流を通して国際関係をはぐくむ

熊本県産山村立産山中学校教頭 野村宗生

交流概略

(1) ヒゴタイ交流のこれまで

本校は、昭和63（1988）年度よりタイ王国立カセサート大学附属中学校との交流（通称ヒゴタイ交流）を実施している。「ヒゴタイ」とは産山村花^{うぶやま}のヒゴタイと「肥後とタイ」を掛けた名前である。ヒゴタイ交流は、村と中学校が一体となって始めた交換留学生（以下派遣生という）による国際交流であり、当初「村独自の誇りある教育を」という思いから国際化というキーワードに着目して始めた。この交流が始まる前は、村内で建設中のダムで技術を学んでいた東南アジアの研修生等を産山中に招き、講演会などを開くことで、国際理解教育の推進を行っていた。その後農水省の職員に「身近なアジアの国と交流を始めたい」と話を持ちかけ、カセサート校を紹介してもらいこの交流が始まった。



産山村花のヒゴタイ

昭和63年7月に協定書を取り交わし、その秋にタイ側の第1回派遣団が来村し具体的取り組みが始まった。今年度で派遣としては20回目、受け入れとしては21回目を迎える。派遣生の構成は原則として男子生徒2名、女子

生徒2名、引率教師1名の計5名である。しかし、今年度は20周年記念にともない派遣生10名、引率教師1名、村内から随行団として29名がカセサート校を訪問した。派遣生は、お互いに長期休業（産山：夏休み、タイ：10月）を利用して3週間それぞれの家庭にホームステイして、授業、各種行事、小旅行等に参加した。

(2) カセサート大学附属学校について

通称サティカセと呼ばれる国立大学附属学校は、タイの首都バンコクにあり、小1～高3まで約3000人の生徒が同じ敷地内で学んでいる。また、カセサート校は他にも福井県朝日小学校や広島県瀬戸田小学校等とも交流するなど国際交流には力を入れている。また全教科英語のみで学習するプログラム（IP）や日本語や中国語が学習できる分校（チョンブリ校）をもつなど、先進的な取り組みを続け、優れた人材を世界に輩出している。

2 交流の実際

(1) タイ王国への派遣生

① 選考および派遣準備

本校はカセサート校へ毎年4名の派遣を行っている。選考方法は、希望者の中から面接を行い、国際理解に対する関心、学習への意欲、発表能力等を総合的に評価し最終決定を行っている。

4名の派遣生と引率教師はカセサート校での歓迎式典や学校生活に向けて、タイ語のスピーチ、日本や郷土の文化を学ぶ。たとえば、和楽器演奏・日本舞踊等を練習したり、普段の教科学習で学んだことを深め披露に向けて準備を行ったりしていくことになる。4名の派遣生は、国際理解教育の一つの目標である日本や郷土の伝統芸能・文化を学習していきながら、日本の伝統的な文化を見つめ直し、自らの存在意義（アイデンティティー）について考える機会をもつことになる。

② タイ国カセサート校での生活

カセサート校での学習は、タイ語・民族楽器・タイダンス・礼儀作法の学習をはじめ、配属されたクラスでの数学・英語・保健体育等の授業に参加する。これらは、すべてカセサート校の生徒とともに学習する。



タイダンスの授業を受けている派遣生



本校生が理科の授業を受けている様子
(中央が本校生)

カセサート校では自国の伝統文化を後世に伝えるという意図のもと、伝統芸能の継承が教育課程の中に取り入れられている。このことは、日本の国際理解教育での「自国の伝統文化を尊ぶ」という文部科学省の指針とも重なり、大いに参考になる取り組みである。

派遣生はカセサート校の保護者宅での3週間のホームステイを通し、タイの家庭生活も

体験し、異文化交流で、お互いの違いを認め合うことのすばらしさと、どこの国でも普遍的な「優しさ、思いやり等の価値」を学んでいく。当然、言葉の障壁はあるものの、心を開くことで信頼と友情が育っていくことを確認できる3週間となっている。

(2) タイからの生徒の受け入れ

① 派遣生の受け入れ準備

毎年カセサート校からの派遣生は10月の長期休業日を利用し、こちらからの派遣期間と同じく4名の派遣生と引率教師の計5名で3週間の交流となる。タイ派遣生一行の来日に照準をあわせて、8月または9月に第1回のホストファミリー保護者会を開催している。ここでは、家族をタイの生徒に紹介する写真・挨拶文の作成、今後の日程、心構え等について話し合う。挨拶文については、生徒自身が英作文を作成し、英語担当教師を中心に添削を受け、タイ国へ郵送することとなる。なおホストファミリーについては、4月当初のPTA総会で保護者の希望を募り、生徒の学年を考慮して決定している。

また、訪問中のタイ派遣生4名は通常本校生と同じ授業を受けるために、教科や学年を教務の方で調整し、日本語版・英語版案内のパンフレットの準備も行っている。各クラスでは歓迎ポスターの作成、クラスでの歓迎会の準備を生徒全員で取り組んでいる。

② タイ派遣生の日本での生活

交流期間中本校生徒とともに各教科2～3時間の授業を受ける。ここではグループ学習・調査発表学習等を通じ、いろいろな方法でのコミュニケーションが見られ、活発な授業風景となっている。行事等では、記念植樹・秋季見学旅行・伝統芸能の体験・文化祭等と盛りだくさんのプログラムを消化し、3週間の

学校生活を送ることとなる。また、地元の高専学校を訪問し、華道や茶道、また武道の体験を通し日本の伝統文化を学んでいる。この期間派遣生は学校におい



書写の授業で交流を行っている本校生
(中央がタイ国からの派遣生)



給食の時間での交流の様子
(右から二人目がタイ国からの派遣生)

ては本校生徒とともに、家庭生活においてはホストファミリーとともに、日本の生活習慣・文化を学習している。

3 交流の成果

当初、ヒゴタイ交流の派遣および受け入れの3週間、本校生の積極的交流は一部の生徒を中心としたものであった。しかし回を重ねるごとに、カセサート校生との積極的交流が全校生徒に表れている。また、10月のカセサート校からの生徒を受け入れる際には、本校からの派遣生はもちろん、それ以外の生徒が授業や諸活動の中で意欲的に関わる姿が多く見られるようになったことは、大きな成果である。本校は、昨年度からの小中一貫教育の実施に伴い、小学校からの英会話学習を行っている。中学校でも各学年年間35時間の英会話の授業を、これまでの英語科にプラスして行っている。英会話は、文字通り会話中心に授業が行われる。ヒゴタイ交流で英語を使つてのコミュニケーションの経験があるため、

子どもたちが積極的に授業に参加している様子がうかがわれ、学力調査等の結果からも、聞くことや話すことの観点で高い数値が見られる。



英会話の学習で交流を行っている本校生
(右がタイ国からの派遣生)

このように、互いの国の文化や伝統を理解し、言葉の壁を乗り越え、心と心を通わせることによって、国際社会の一員としての自覚を深めるとともに外国語学習への意欲も高まってきている。また、授業はもちろんその他様々な活動を通し英語、タイ語、日本語を通しコミュニケーションを図ることで、国際理解教育の目的の一つであるタイ国の言語・文化について学び理解するとともに、自国文化についても深く学ぶこととなり、相互の文化を認め尊敬する態度も養っている。

これまで本校からの派遣生が83名、受け入れたホストファミリーの数は延べ件数で122件になる。また、今年度は、TV会議システムを導入し、インターネット回線をとおして常時双方向での交流ができるようシステムの構築を行った。この21年間、その機会ごとに交流を見直し改善が行われてきた。今後も、学校と行政、そして地域が一体となり交流を推進していくことで、さらなる発展を期待したいものである。